

本紙の読者のなかには、多数の受験生もいるでしょう。

センター試験は終わつたが、各大学の入学試験はこれから本番だ。

高卒で社会に出たわたしには大学入試の経験がない。この時期の受験生が内面に抱え持つ、こころの葛藤は推し量れない。

が、類似の体験は幾つも経てきた。

たとえば小説新人賞への応募もそうだった。

小説新人賞は世に幾つもある。大半は一年に一度の募集である。

一年を費やして応募作を

仕上げた。たつぷり時間はあると思えていたのに、締切が近づくとつれて「まだ足りない」「果たしてこれで完成しているのか」と、

人生 目利き 腕利き

自分の内から疑問符が湧き上がってきた。

この声に焦りを覚え始め

作家 山本 一力

ると、ものが見えなくなつた。あれもだめ、これもできていないと、自己否定のスパイラルに嵌まった。

では、なぜ受賞できたのか？

答えは、はっきりしている。おれはこの一作で真つ向

いつも通りに

勝負すると、開き直つたことだ。

仕上げた80枚の原稿を、提出する日まで毎日、大げさくはなくまさに毎日読み返した。

特別なことをしたわけではない。自分で仕上げた原稿を、自分で正當に評価した。

そして誤字・脱字、誤つた表現、ひとりよがりの記述がないかを自己検証した。

締切日から選考結果の発表日までは、半年以上の間、休まずに新たな原稿を書き続けた。

折っているだけでは、願いは通じない。

毎日、当たり前のごとくやり続けていればこそ、願いを聞き届けてもらえたと信じた。

過日、日本水泳連盟会長の鈴木大地氏と、ある番組で一橋だった。折しもセンター試験の初日で、験担ぎ

が話題になった。「大勝負に臨むときは、住まいの近くの成田山にお参りました」

こう言つたあとに鈴木氏は続けた。

「でも思いつき練習をしただけで、です」

大きな試合に臨むべきこと、いつもの練習を続けていることで自信がわきま

す。練習あつてこそのお参りですと鈴木氏は言い切つた。

その通りだと、氏の話に深くうなずいた。

いまは人生八十年の時代だ。長い道のりの何方所にも、試験という名の関所が待ち構えているに違いない。

江戸時代には本物の関所が設けられていた。通行手

形などの書類審査も行ったが、不審者の真の見極めは別室に控えた吟味役が、覗き穴から行っていた。

むやみに、ひたひたに汗を浮かべている者。

思遣い尋常ならざる早さで落着かぬ者。

面目がたえず動き、まはたき著しき者。

これらの者はたとえ書類が完備していても別室にてきつい詮議がなされた。

稽古は〇ことを真切らないという。

自分が信じられなくなり、自己否定を始めた者には深い淵が待ち受けている。

おのれを信じて、堂々と試験と向き合おう。積み重ねてきたものが本番を支えてくれる。